DachuRa 3rd story-Apple blossom-

I Prologue

「――先生、私はどうして人の心が分かるの？」
万年筆で紙に文字を書く音、そして規則正しい秒針の音が響く、清潔な診療所。床に付かず宙に浮いた足をぶらつかせながら、私はなんと無しに、〝先生〟の背に向かって問いを投げ掛けた。
すると先生はペンを置き、振り返って私と視線を合わせた。
色素の薄いアッシュの髪と、ブルーグレーの双眸。不健康な程に白い肌をした先生は、まるで物語の中で語られる〝天使〟の様だった。そんな彼が私の瞳を真っ直ぐに見つめ、徐に口を開く。
「それは、君が天使だからだよ」
優しく紡がれる言葉は神様のお告げの様で、ふわふわと幼い心を揺るがす。
「天使……」
復唱する様に呟くと、先生は「ああ、そうだ」と言って深く頷いた。
「人を救うのが天使の役目だ。君は神様から素敵な能力を授かった天使なのだから、その力を使って人を救ってあげなさい」
私は先生の言葉に、否定も肯定もしなかった。ただもう一度、口の中で「天使」と呟く。
「今は分からなくとも、いつか理解できる日が来るよ」
先生が私に手を伸ばし、頭をぽんぽんと二回叩く様に撫でた。
まだこの世に生を受けてたったの五年しか経っていなかった私には、先生の言葉の意味を良く理解する事が出来なかった。だが、親に捨てられ、その親からもずっと化け物扱いされていた私にとって、〝天使〟という言葉は非常に甘美なものだった。
私を見つめるブルーグレーの瞳が、優しく細められる。
私が天使ならば、先生は神様だろうか。そんな事を呑気に考えながら、先生が淹れてくれたエルダーフラワーのハーブティーを口にする。マスカットを連想させる香りを放つそのハーブティーは、私の口に合う物では無かった。しかし、何故だか心が休まる様な、温まる味がした。

――時は十九世紀末、大英帝国ロンドン。
これは私の過去と現在を描いた、歪な愛と長い後悔の話。

II　From this day onwards

――現時刻は十八時。

ティーカップに注がれた紅茶の香りを楽しみ、そっと口に含んだ後、窓際のテーブルに突っ伏して転寝をする幼馴染――セドリック・アンドールに目を向ける。

今日は、彼の仕事の依頼者であるラルフ・スタインフェルドからパーティーへの同行を命じられていた筈だ。約束時間は、確か十八時。

約束の時間を迎えてしまった今、彼を叩き起こした所で「何故もっと早く起こさなかったのだ」と理不尽に怒られるのだろう。どの道怒られるのなら、起こさずに怒られた方が幾分マシだ。

それに、約束の相手は貴族の男。約束の時間を大幅に遅れてくるに違いない。抑々今日の約束ですら、覚えていないかもしれない。貴族なんて、そんなものだ。

再び紅茶を啜り、膝の上に置いていたお気に入りの本に視線を落とす。

「――今、何時だ」

ふと耳に入ったのは、目を覚ましたのであろうセドリックの独言(どくげん)。

「もう、十八時だけど」

そう返事をしてみると、彼の視線が壁時計に止まった。そして暫く時計を見つめた後、彼が勢いよくソファから立ち上がり、洗面所へと駆け込む。

「今日用事あるって言っただろ！　時間分かってたなら起こせよ！」

洗面所から怒鳴り声が聞こえるが、今の私にとってはそんなもの知った事では無い。抑々私は、今日のパーティーへの同行は反対していたのだから。

今日は、私の大切な友人であるマリア・ウィルソンの娘、ノエルがスタインフェルド家に引き渡される日だった。基本子供の引き渡しには、依頼者当人とブローカーが立ち会う事が必須とされている。

しかし、何を思ったのか依頼者当人であるラルフ・スタインフェルドは、引き渡しを妻であるローズ・スタインフェルドに押し付け、名家エインズワース家で開催されるパーティーに参加すると言い出したのだ。そして有ろう事か、ブローカーであるセドリックにそのパーティーへの同行を命じた。

セドリックは何度も、引き渡し日の変更を提案していた。だが、ラルフ・スタインフェルドがその提案に応じる事は

無かった。
結果、今回の取引のみ特例で、当人不在の中子供の引き渡しが行われる事になったのだ。
決まりを破る事は、トラブルを招く原因となる。
今回の特例を、私は酷く反対した。それこそ、朝から晩まで彼に考え直すよう訴え続けた。しかし彼は決まって、「特例は当人不在だけでは無い」と言った。
彼の言っている事に、間違いはない。
抑々彼の仕事には〝知人や友人からの依頼は受けない〟というルールがあるのだ。それを私が必死に頼み込み、特例を認めさせた。マリアとセドリックに接点は無かったが、私の友人である事には変わりはない。
故に、私に「決まりを破る事は、トラブルを招く原因になる」だなんて言う資格など最初から無かった。
それでも、私は大切なマリアの取引をぞんざいに扱って欲しくは無かったのだ。しかしそんな私の願いは、悲しくも無になった。
「――セディが行けないなら、私がマリアちゃんに付き添いたかったな……」
脱衣所から出てきた彼を視界に捉えながら、嘆く様に呟く。
勿論、マリアを心配する気持ちに嘘は無い。しかしそれ以上に、マリアの代わりに時々自身が面倒を見ていたノエルの最後を見届けたいという気持ちが強かった。
「お前は今回の取引に関与してないだろ。それに、担当も違う」
「そう、だけどさ」
自身の不安が強く表れた顔を隠す様に、ティーカップに口を付ける。口内を満たした紅茶からは、過度な心配と不安の所為か何の味も感じられなかった。
引き渡しが行われるのは、何時からだっただろうか。無意識的に時計に目を遣ると、そんな自身の不安を見透かした彼が苛立った様に口を開いた。
「そんなに不安なら、取引なんてしなければ良かっただろ。抑々、俺達の仕事は――」
「知人や友人の依頼は受けない、でしょ？」
彼の言葉を遮り、溜息交じりにその先を答える。彼の感情は苛立ちを超え、最早呆れている様だった。それ以上私に何かを言う事は無く、扉を開く音、閉じる音と二回、バタバタとホールに響かせて、セドリックは足早に屋敷を去っていった。私が吐いた大きな溜息は、誰に聞かれる事無く僅かにホールに反響した後消える。
彼はこれから、パーティーが開催されるエインズワース家へと向かうのだろう。辻馬車を使うのか、それとも街の

中を駆けて行くのかは分からない。しかし少なくとも、急いでいるのは確かだ。
時間通り約束の場所を訪れたスタインフェルドに叱責され、険悪な関係になってしまえば良いのに。そんな事を思うが、マリアとの取引が破綻になってしまっては困る。
一人きりになった屋敷で、天井からぶら下がるシャンデリアをぼんやりと見上げた。瞳を刺す明るさに、目を細める。
「――少し、様子を見るくらいは良いよね」
シャンデリアを眺めながら誰に言うともなく呟き、勢いを付けてソファから立ち上がった。その拍子に、膝の上から本が滑り落ちる。慌ててその本を拾い上げ、僅かに皺になってしまったページを伸ばしつつ、付着した埃を軽く払った。
私はセドリックの様に、お金に余裕は無い。故に、隣町に位置するスタインフェルド家まで辻馬車を使う事は出来ない。
「足、痛くなるかな……」
今日は普段より高いヒールの靴を履いている為、少々不安だ。しかし、今から借家に戻り靴を履き替えてスタインフェルド家まで向かう、というのも面倒である。
この屋敷の二階にも自身が所持している靴を何足か置いているが、それ等全て履き慣れていない靴であり、ヒールの高さも似たり寄ったりだ。
足が痛くなったら、その時はその時だ。なんて自身に言い聞かせ、ホールの灯りを全て落とし屋敷を後にした。

III Anger

あれから私は、四十分程かけて隣町のスタインフェルド邸まで足を運んだ。
自身の身長を遥かに超える高い柵の前で、明かりの灯った各窓に、順番に視線を走らせていく。
当然、此処からでは彼女達の姿は見えない。抑々、現在この屋敷にマリアとノエルが居る保証など何処にもないのだ。
「――何やってんだ、私……。馬鹿だな」
他でも無い自分自身に向かって呟き、その場にしゃがみ込んで髪をぐしゃぐしゃと乱した。
案の定というべきか、高いヒールの靴を履いている所為で爪先がじわじわと痛みだしていた。靴の上から爪先を摩り、帰り道を案ずる。

こんな場所で貴族の家を物色していては、周囲の人間に怪しまれてしまう。いつまでも屋敷を眺めていたって二人を見つける事は出来ないのだから、潔く諦め借家に帰ろう。そう思い、痛む足に鞭を打ちその場にゆっくりと立ち上がった。

屋敷から離れる事を少々名残惜しく感じながらも、足が痛むからだと自分に言い訳をして普段よりもゆっくりとした足取りで屋敷から離れる。

――私にとって借家は、とても居心地の良い場所では無かった。

幼少期セドリックと共に借りたボロアパートとは違い、内装はそれなりに整っている方だ。与えられた部屋は決して広いとは言えないが、ゆっくりと身体を清められる浴室も完備していて住むには充分すぎる場所である。

しかしそれでも、私にとって居心地が悪いと感じる一つの大きな理由があった。

再び四十分掛け戻って来たのは、私が借りている部屋があるアパート。外装は他の建物と変わらないデザインで、白い外壁が印象的だ。

玄関扉の前で深呼吸を繰り返し、扉を大きく開く。

「――た、ただいま、帰りました……」

玄関先で立ち尽くし、灯りの宿ったアパート内に向かって声を掛ける。すると、一番手前の部屋から一人の女性が姿を見せた。

彼女が、このアパートの大家であるシーラ・ガードナー。意匠の少ないボルドーのドレスにオフホワイトのエプロンを身に着け、アクセントに金のブローチが胸元に付けられている。ブラウンの髪は丁寧にシニヨンにして纏められていて、如何にも〝品のある女性〟という風貌だ。

それに比べて私は、淡いブラウンのシャツにボルドーのリボンタイを付け、男性のウェストコートに似たベストを身に纏い髪も無造作に下ろしている。そして極めつけは、派手な印象を抱くであろう赤い紅と香水。シーラとは正反対である。

「――おかえりなさい」

そう静かに告げたシーラは、長い袖先で口元を覆う様に隠した。私を見つめる鋭いチャコールグレーの双眸は、まるで汚らわしい物でも見るかの様だ。

そんな視線を向けてくるシーラが、私は大の苦手だった。

シーラが私を良く思っていない事は分かっている。いつも此処へ帰る度に、気分を害したかの様な顔をして私を睨みつけ、此処へ客人が訪れた際には私の部屋に聞こえる程の大声で私を誹謗する。食事付きの契約の為朝食は此処で摂る事が多いが、わざと冷めきった料理を出された事もあ

った。
それに、彼女と対面した瞬間、ジリジリと気分の悪い耳鳴りがする。まるで耳の奥が焼け焦げているかの様だ。その音こそが、自身がシーラに嫌われている何よりの証拠だった。
「――お夕飯は？」
そう自身に尋ねるシーラは、露骨に面倒臭そうな表情を浮べた。よく此処まで感情を顔に出せるものだと、感心してしまう程である。
「あ、えっと……外で食べて来たので結構です」
「……そう」
最後に、シーラが私の全身を舐める様に見つめ、踵を返し奥の部屋へと消えていった。
姿が見えなくなり、漸く自身を苛む耳鳴りが止む。
「……ほんと、息が詰まる」
ぽつりと溜息交じりに言葉を漏らし、なるべく音を立てない様にそっと階段の方へと足を向けた。
階段を上った先、二部屋あるうちの一つが私の部屋だ。隣の部屋も人に貸している様だが、私と生活スタイルが大きく異なる為その人物とは此処へ来てから数える程度しか顔を合わせた事は無かった。
ポケットからキーリングを取り出し、その中から最も短い真鍮の鍵を部屋の鍵穴に差し込む。
「あれ……？」
鍵は音無く回り、解錠された手応えも無い。鍵を閉め忘れてしまったのだろうか。鍵を抜き取り、ドアノブに手を掛けた。
幾ら借家とはいえ、この先は私のプライベートスペースである。その為鍵の閉め忘れには充分気を付けていたが、思い返してみれば今朝は少々寝坊をしてしまい急いでいた。決して疚しいものがある訳では無いが、シーラなら無断で部屋に入りかねない。次から気を付けなければと、そう思いながら扉を開いた。
「――！」
瞳に飛び込んできた、最も恐れていた光景。
血液が沸騰しそうな程の怒りに、力任せに扉を閉め階段を駆け下りた。
「シーラさん！」
一階の奥の部屋。そこはシーラの活動スペースだ。ノックも無しに扉を開き、叫ぶ様に彼女の名を呼ぶ。
此処から先は、自身が勝手に立ち入って良い場所では無い。マナーにも欠ける行為だ。
しかし、今この怒りを抱えた状態ではとても品のある行動など出来そうに無かった。

「あら、なぁに。ノックも無しに入ってくるなんて非常識じゃないかしら」
「非常識なのはどっち⁉　私の部屋、勝手に入ったでしょ！」
　開いた自室の扉の先、瞳に飛び込んできたのは水浸しになった本の山だった。眠れない夜に読もうと思い、職場の書斎（ライブラリー）から選りすぐって持ってきた物だ。大切にしていた本の一部である。
　それを、読み終わった順にテーブルの上に積み上げていた。――積み上げていた私が、間違っていたのだろうか。
　意図して掛けられたものだと分かり切った水は、テーブルから零れ床のカーペットにまで伝い落ちていた。嫌がらせをするにしても、程度という物があるだろう。
「本！　水浸しだったんだけど！」
「あらぁ、ごめんなさいね。貴女の部屋、殺風景で品が無いでしょう？　だから花の一つでも飾って差し上げようかと思ったのだけれど、うっかり花瓶を倒してしまって……」
　シーラの顔に、にたりと不気味な笑みが浮かぶ。
「花瓶倒したって水量じゃないし！　明らかにわざとでしょ！　そんなに私が憎い⁉」
「わざとじゃないわよ、酷い事を言うのね」
「それに普通、水零したんだったらある程度片付けると思うんだけど……！　テーブルの上も、カーペットも水浸し！　そのままじゃん！　あれをわざとじゃないって言うには流石に無理があるんじゃない？」
　パチパチと、何かが弾ける様な音が耳奥で響く。この音は、街を歩いている時にも時々耳にした事がある。相手を嘲り笑い、そして相手の不幸を心から喜ぶ音だ。
　此方の出方を伺（うかが）っているのか、シーラは何も言わない。しかし、その顔には隠しきれない薄気味悪い笑みが滲んでいた。
　――怒りに任せ、シーラに手を上げるのは簡単だ。しかし、そんな事をすれば私を此処から追い出す理由を彼女に与えてしまう事になる。
　此処を追い出されれば、私は行く当てを失う。
　暫くは職場で寝泊まりをすれば良い話だが、それも長くは続かないだろう。セドリックに気付かれれば、追い出される事間違いない。
「――二度と、私の部屋には入らないで」
　掌に爪が食い込む程強く拳を握り締め、踵を返しシーラの部屋を後にした。

IV The last smile

職場の一室。此処は、私が約一年間掛けてセドリックに強請り続けた末に手に入れた、私専用の書斎(ライブラリー)だ。

壁を覆う様に設置された沢山の棚に、びっしりと詰め込まれた愛読書。部屋は決して広くは無く、壁と本の多さに圧迫感を覚える程ではあるが、私にとっては何よりも落ち着く場所であった。

床にタオルを敷き、借家の自室から回収した濡れた本達を丁寧に並べていく。ある程度水は拭き取ったが、後は自然に任せ乾かすしか方法は無い。今はただ本達がカビてしまわぬ様に祈る事しか出来ず、並べた本の前にしゃがみ込みぱらぱらと濡れたページを捲った。

シーラが私を嫌うのは、今に始まった事では無い。初めてあのアパートに行った時から、彼女から聞こえる音は妙だった。

最初こそ、大家とは仲良くなるべきだろうと私なりに彼女と上手く接しようと手を尽くしてきたが、不快な音は増すばかりで結局距離が縮まる事は無かった。

それは、私と彼女の生活の違いだ。彼女は自身の家を借家として貸し出せる程の身分である。しかし私は、本来下層階級だったものをブローカー業で食い繋ぎ、身分を誤魔化している人間だ。鋭いシーラは、それに気が付いていたのだ。

そしてまた、彼女は私との服装や生活スタイルの違いにも不信感を抱いている様だった。シーラは品位を最も重要視し、自身が〝品が無い〟と判断した物は全て自身の視界から排除しようとする癖がある。故に、派手な服装や香水などの化粧品を好み、不規則な生活をしている私を品が無いと判断し、追い出そうとしたのだろう。

彼女は今日、私に手を上げさせる為にわざと本に水を零した。大家に手を上げる人間には、退去命令が出せるからだ。

シーラも、よく此処まで徹底出来るものである。他者に嫌がらせをする事が最も品の無い行為だという事に、気が付かないのだろうか。

自身の膝に手を突いて立ち上がり、窓際にぽつりと置かれたアームソファへ足を向けた。ぼす、と大きな音を立てソファに座り、サイドテーブルに置かれていた読みかけの本を開く。

――眠れない夜というのは、実に不快で押し寄せる波の様に不安が広がっていく。そんな私の不安を和らげてくれ

るのは、本の中の世界だった。
誰が書いた物か、誰が見た物かだなんてどうだっていい。文字にして描かれた自分以外の人物の人生にのめり込む事で、自分は〝普通〟の人間になれたのだと錯覚する事が出来た。
眠る事も、頭を回す事も、人の心を感じ取る事も、する必要が無い。ただ、文字を目で追い、理解し、その人物の人生を生きる。それが私にとって、唯一の救いであり至福の時だった。
火が付いた様なシーラへの怒りも、文字を目で追う事で次第に収まっていく。セドリックには怒られるかもしれないが、今晩は此処で寝泊まりをしよう。借家には、明日の夜にでも帰ればいい。明日になれば、シーラも少しは落ち着いている筈だ。
そう思いながら、膝の上に置いた本のページを捲った。

◇

カーテンの隙間から、陽の光が差し込む早朝。最後に本のページを捲ったのは、どの位前の事だっただろうか。うとうとと、夢と現実の間を彷徨っているこの時は、安堵とも不安とも呼べない妙な時間だ。そんな私を現実へと引き戻したのは、玄関扉が四度ノックされる音。
慌てて本を閉じ、ややふらつく足で書斎を出る。
こんな早朝に、依頼者だろうか。欠伸をしながら階段を降り、手櫛で髪を整え玄関扉を解錠した。ゆっくりと扉を開き、眩しい光が差す外へと視線を向ける。
「――おはよう、マーシャ」
頭の隅に残った、シーラの嫌がらせを払拭する程の優しい声。その声の主は、私が最も気に掛けていた人物だった。
「マリアちゃん……！　お、おはよう。どうしたの、こんな朝早くに……」
「取引の書類、持ってきたの。アンドールさんは居る？」
「うぅん、セディはまだ来てないよ」
少し傷んだ赤毛の髪は丁寧に後頭部で束ねられているが、その所為か暴力の跡である痣が目立つ。いつ見ても、慣れない物だ。思わず手を伸ばし頬の痣を撫でると、マリアがふふ、と悲しげに笑った。
「ごめんなさい、早く来すぎてしまったわね。あの子の居ない部屋は、つらくって……」
彼女の瞳は、赤く腫れている。心を読まずとも、彼女が一晩中泣き腫らした事は直ぐに分かった。
「大丈夫だよ。温かい紅茶淹れるから、セディが来る迄客室で少し話そう？」

「ええ、そうね。ありがとう」
客室へマリアが向かっていくのを尻目に、小走りでキッチンへと向かう。
棚から取り出したのは、昔マリアが教えてくれた銘柄の紅茶だ。少々高価な物で、特別な日に淹れようと大切に保管していた物だが、今日がマリアと会う最後の日になるかもしれないと思うと自然とその茶葉に手が伸びていた。
林檎の絵が描かれたお気に入りのカップとソーサーを取り出し、薔薇の彫刻がされたティースプーンで茶葉を零さない様丁寧にポットに入れる。紅茶に目が無い私にとって、紅茶を淹れる時は非常に心が安らぐ時間だった。しかし今は、客室にマリアを待たせている。
少しでも早く、マリアから話を聞きたい。そんな思いが先走り、急ぐ様にポットに湯を注ぐ。
キッチンに置いていた小さな砂時計をひっくり返し、食入る様に落ちていく砂を見つめた。
早く、と急かした所で、時間の進みは変わらない。しかし、それでも心の中では砂が早く落ちる様にと焦ってしまう。
三分が経ち、砂が全て落ち切ったのを確認してから紅茶をカップへと注ぐ。心を奪われてしまいそうな程美しい色合いの紅茶に、急ぐ気持ちが和らぐ様な香り。一頻(ひとしき)りそれを堪能した後、カップとシュガーポット、そしてトング、ミルクピッチャーをトレーに乗せ足早にキッチンを後にした。
――丁度、玄関扉の前を通りかかった時。扉の向こう側に人の気配を感じ、思わず足を止めた。
依頼者だったとしたら、現在客室は埋まっている上私一人しか居ない為、引き取って貰う他無い。ドアノッカーが叩かれるかと思い暫く玄関扉を見つめていると、予想を裏切る様に鍵が解錠された。そしてやや強めに、扉が開かれる。
その瞬間、心の中にもやもやとした黒い感情が湧き立った。それを言葉にするのは難しい。怒りとは違うが、タイミングの悪さに少々苛立つ様な、将又(はたまた)残念に思い泣きたくなる様な、そんな感情だ。
顔を見せたのは、幼馴染兼同僚のセドリックだった。朝が弱く寝起きが悪い私が言えた事では無いが、彼がこんな早朝に此処に来る事は非常に珍しい。
「――あれ、セディ？」
胸の中の黒い感情を隠し彼に声を掛けると、彼の肩がびくりと揺れた。そしてやや複雑な表情を浮べ私と視線を合わせる。
「珍しいね、こんな朝早くに」

「……まぁ、ちょっと」
曖昧に誤魔化し、私からふいと顔を逸らしてしまった彼の姿に、ジリジリと耳の奥で小さな音が聞こえた。現在私の意識が客室に居るマリアにしか向いていなかった為、明確なものを感じ取る事は出来なかったが、彼は何か私に隠し事、もしくは言わなくてはならない事がある様だ。マリアが此処を去った後、彼と会話をする場を設ける必要があるだろう。
「――客人か？」
私の手に持ったトレーを見て、彼がぽつりと呟く様に言った。
「……うん。マリアちゃんが来てるよ」
その言葉で意識が引き戻され、再び心の中にもやもやと黒い感情が広がる。しかし、これ以上彼に〝我儘〟は言えない。マリアとの会話の時間が欲しいと言って、取引を長引かせる訳にもいかなかった。
それに、マリアは此処へ来た時他でも無いセドリックを探していた。マリアの為にも、此処はセドリックに客室に行かせるべきだ。
「セディのお客さんだから、早く行ってあげて」
紅茶を乗せたトレーを、彼に差し出す。
「別にこっちは急ぎじゃない。少し、話をしてきても構わないが」
「うぅん、いいの。セディは良くても、きっとマリアちゃんが良くないと思うから」
セドリックは、人に関心が無く少々薄情な人間である。しかし幼馴染だからか、私には時々こういった優しさを見せてくれる事があった。尚、本人は無自覚の様だが。
だが今は、その優しさが欲しい訳では無い。情けで時間を作って貰っても、複雑な気持ちを抱くだけだ。
受け取る事を急かす様に、手に持ったトレーを揺らす。その拍子に、ティーカップに注がれた色の良い紅茶が波打った。
「お前がそれで後悔しないなら」
「後悔なんてしないよ。マリアちゃんとはずっと友達だから。他の依頼者と違って、またいつでも会えるから」
黙らせる様に、静かに目を細め彼の瞳を見つめる。
今の言葉は真実か、それともただの願望か。
そう問われれば、答えは迷いなく出てくる。限りなく、願望に近い言葉だ。
マリアとはずっと、永遠に友人である事には変わりない。彼女を、忘れたりはしない。
しかし、随分と前から伝わってきていたマリアの死の切願に、いつでも会える関係ではなくなってしまう事を覚っ

ていた。
「……そうか」
そう一言呟いたセドリックが、私からトレーを受け取った。マリアに次が無いという事を、セドリック自身も気が付いている様だった。だがそれも、無理もない。
マリアの現状を知って、次があると思う人間は少ないだろう。
「マリアちゃんの事、お願いね」
客室へ向かっていくセドリックの背に言葉を投げかけ、小さく溜息を吐いた。ホールに一人取り残され、再び静寂が訪れる。ぼんやりと客室の扉を見つめながら、何も考えられない頭を抱えその場に立ち尽くしていた。

身体が動いたのは、セドリックが客室に入り約三分が経過した頃。なんと無しに足を向けた客室の前で立ち止まり、額を扉に付けた。
マリアが恋しく、つい客室の前まで来てしまったが、会話を盗み聞きするのはやや気が引ける。それでも、マリアの声を少しでも聴いていたい。扉の向こうから聞こえる二人の声に耳を傾け、瞳を閉じた。
人の心が読める事と関係があるのか無いのか、私は人並み以上に耳が良い。普通では聞こえる筈が無い扉の向こうの声ですら、私の耳にははっきりとした音で届く。
セドリックには地獄耳だと幼少期から言われ続けていたが、今だけは耳が良くて良かったと心底思った。

――扉の前で耳を傾ける事約十分。久しく聞いたマリアの明るい声に、安堵に似た、切なさに似た感情が胸に広がる。
しかし感じたのはそれだけでは無い。聞こえて来た、〝女性〟、〝奥様〟、〝妻〟などの単語。話を聞くに、どうやら昨晩のパーティーの帰り、セドリックは女性を連れて街を歩いていたらしい。
極度の女性嫌いであるセドリックが女を連れて歩くなど、珍しいなんて言葉では言い表せない。しかしマリアの口振りからするに、それは事実なのだろう。それに、セドリックがその女性の事を〝妻か〟と問われて否定を示さなかった。
もしかすると、先程セドリックから感じた〝私に言わなくてはならない事〟がその女性の事なのかもしれない。これは後で、しっかりと彼から読み取る、もしくは問い詰める必要がありそうだ。
そんな事を考えているうちにいつの間にか会話は終わっていた様で、扉の向こう側にマリアの気配を感じた。早

く此処から退かなければ、盗み聞きしていた事がバレてしまう。そんな考えも虚しく、何も出来ぬまま客室の扉が開いた。
　二人分の視線を浴び、何も言い訳が思い浮かばず苦笑いを浮かべ一歩、二歩と後退る。
「マリアちゃん、もう帰るの？」
「ええ、色々ありがとうね、マーシャ」
「いつでも遊びに来てね。また、話も聞くから」
　彼女が私を暫し見つめ、切なげに笑った。彼女から伝わる死の切望は、未だ消えていない。寧ろ、その願いは強くなっている様に感じる。
　マリアは去り際、私とセドリックを交互に見つめ悲しげに微笑んだ。これが最後になる、そう分かり切っているのに何も出来ない絶望感と、自身の無力さ。しかし、死を願う人物を止めるのは、止めた人間のエゴでしかない。私はマリアの苦しみを、たった一つだって肩代わりする事は出来ない。ただ手を握って、話を聞く事しか出来ない。
　それに、彼女に子を手放せと残酷な提案をしたのは私だ。私に彼女を止める資格など無い。
「――マリアちゃんね、何度も死のうとしてたみたいなの」
　重い沈黙が苦しく、喉奥から言葉を絞る。
「まぁ、何となく察しは付くけどな」
　そう言ったセドリックは、私の隣でただマリアが去った後の扉を眺めていた。
「……いつでも遊びに来て、なんて言ったけど、マリアちゃんもう此処には来ないよ」
　そんなセドリックに、更に言葉を続ける。
「――何度止めてもリストカット繰り返すマリアちゃん見て、なんかもう、それ以上止められなくなっちゃって」
「友達だったんじゃないのか」
「友達だよ。友達だからだよ。だって自殺を止めるのは、止めた人間のエゴでしょ？　死のうとするって、よっぽどの事だと思うの。もうこれ以上生きていても何にもならない……これ以上生きてるのがつらいって思ったって事だよ。それを無理矢理止めて、死ぬ事は悪い事だって言ったとしても、その人の心は救われないし、寧ろ苦しめるだけだと……思ってさ……」
　彼に、こんな話をした事は過去一度も無かった。きっと、彼から伝わるマリアへの僅かな情に、甘えてしまったのだと思う。最も苦しいのはマリアであり、彼女だけがその苦しみを嘆く事が許される。彼女を更に苦しめた私が、苦しいなんて言って良い訳が無い。
　だが幼馴染だからか、彼は少々の弱音を吐く事を許してくれる気がした。

その後彼と軽い会話を交わし、いつまでもマリアの事を引き摺っていても仕方が無いと気持ちを無理矢理入れ替え踵を返した。背後にセドリックの気配を感じながらも、客室に入り黙ってトレーに空のティーカップを乗せていく。

「――なぁ」

今まで黙っていた彼が声を上げ、片付ける手を一瞬だけ止めた。背後の彼に意識を向ければ、自然とその先の言葉が見えてくる。きっと、私の能力について聞きたいのだろう。

「人の感情ってどんな風に見えんの？」

案の定、と言うべきか。予想通りの言葉に、思わず苦笑いが漏れた。

「……うぅん、見えるって感じじゃないんだよね。〝何考えてるか分かる〟と言っても、その人が考えてる事が文字で見えたり声で聞こえる訳じゃないし。表現するなら、耳鳴りや温度……あとはその場の空気感とかかな。人それぞれ微妙に違うそれを感じ取ってるってだけ」

自分自身ですら、この能力のメカニズムを理解する事は出来ない。

ただ瞬時に感じた匂い、温度、欠片の様な記憶に、その人物の心を読み取る事が出来るだけだ。

語言化出来るものなら、もうとっくの昔にしている。

「それは……ただの勘、ではないのか」

「まぁ、勘って言うのが一番近いかもね。私だって分かんないよ。何となく、『この人今嘘ついてるな』とか、『今家庭の事で悩んでるな』とか『隠し事してるな』って分かっちゃうんだもん。でも、その嘘の内容とか悩み事、隠し事が分かる訳じゃないんだよ。だから、はっきりと知る為にはやっぱり会話しなくちゃ駄目」

彼から感じる、女性の影。彼から零れ落ちる様に〝視えた〟のは、昨晩の記憶。誰かは分からないが、彼は若い女性を一人拾った様だ。昨晩彼はエインズワース家のパーティーに参加していた。そう考えると、拾って来たのは若い令嬢だろう。

幼馴染を超えて、弟の様な存在である彼の力になってやりたいのは山々だ。しかし、彼はその女性の事を私に丸投げしようとしている様に見える。

「言っとくけど、私の〝これ〟使いたいとか言われても嫌だから」

故に、少々突き放した様な言葉を口にした。

「まだ何も言ってないだろ」

すぐ様反論されるが、彼は周りの人間の中でも特に分かり易い性格をしている。恐らく、他人に興味が無い故に自

身を隠すという事もしないのだろう。その為か、彼からは特別色々な事を読み取ることが出来た。
「どうせ、まだ私に言わなきゃいけない事とかあるんでしょ？　例えば、昨日拾った可愛い可愛い女の子の事とか」
そう言って彼を一瞥すると、彼がやや複雑な表情を浮べた。彼の事ならなんでも分かる。きっと、今私に感じているのは若干の〝恐怖〟だ。
マリアの事を考えるのはもう辞めよう。これ以上考えた所でキリが無い。
それよりも今は、彼が拾って来た令嬢の方が問題だろう。彼がソファに腰掛けたのを見て、自身も向かいのソファに続いた。

V　His change

「ねぇ、その子ってどんな子？　何処で拾ったの？　可愛い？　令嬢って事は、やっぱり我儘だったりする？」
職場を出てから、私は煩いと自覚する程に喋り続けていた。
気丈に振る舞う事には慣れている。しかし、それでもマリアを失った傷を忘れてしまう事までは出来なかった。ふと気を抜けば、先程のマリアの切なげな笑みが脳内に蘇る。
その為、マリアの事を少しでも考えない様にするにはこうして喋り続ける他無かった。
喋り続ける私に、一歩前を歩く彼は何も言わない。私の言葉に返答する事も無ければ、煩いと叱責する事も無い。ただただ、私に無関心だという事だけが伝わってくる。
しかし住宅街を進み少し経った頃、彼が唐突に振り返り私と視線を合わせた。
「少し位静かに出来ないのか」
彼の視線と共に伝わって来たのは、とある女性の存在。彼が何処に家を買ったのかは把握していなかったが、その家も近いという事だろう。
その憶測はどうやら当たった様で、彼が一軒の家の前で足を止めた。くすみ変色した金属の鍵で素早く解錠し、扉を開く。
「――あぁ、起きてたのか」
家の中に向かってそう告げたセドリックに、沸々と好奇心が沸き上がるのを感じた。幾らマリアの事で傷心していたとしても、彼が拾って来た女性に興味が無い訳では無い。女嫌いの彼が拾って来た女性だ、気になるのは当然だろう。
それに、彼がその女性の為と服を見繕っていた時、随分

と熱心に選んでいる様に見えた。彼から伝わってくる感情は複雑なものであったが、その女性を特別視している事は明白だ。

「ねぇ、セディが惚れた子ってどこ？　中に居るの？」

セドリックに続き無断で家の中へと足を踏み入れ、彼の視線の先へと目を遣った。

「……」

瞳に飛び込んできた衝撃的な光景に、思わず身体が固まる。辛うじて笑顔は保てているが、これは想定外だった。

ベッドの上でブランケットを胸に抱く、恐ろしさを感じる程に容姿端麗な女性。結局セドリックも、女嫌いだと言ってきながら顔で選んだのか、なんて思ってしまう程の美貌だ。しかし、それはそこまで重要な事では無い。

なんとあろう事かその女性は、最も重要である衣服を身に纏っていなかったのだ。露出した胸元、肩、両腕、そしてブランケットの隙間から見える腰。ドロワーズ一枚すら身に纏っていない事を瞬時に悟る。

幸い、彼女の緩くカールした長い髪と、胸に抱いたブランケットの御陰で身体の殆どが隠れている。だが隠れていれば良い、という訳では無い。

「……別に惚れてねぇよ。というか、勝手に入ってくるな」

セドリックの返答に、漸く我に返る。これは、指摘しても良い事柄なのだろうか。

一晩家に置いた女性が裸だった場合、誰もが最初に思い浮かべるのは性行為に及んだかどうか、だろう。しかし私は幼馴染故に彼の性格を熟知している。彼が見知らぬ女性を家に連れ込み、軽率に行為に及ぶ人間だとは到底思えない。指摘するのは、後で良いだろう。

「へぇ、此処がセディの家かぁ。今まで来たいって言っても中々連れて来てくれなかったんだもんなぁ」

動揺した自身の心を落ち着かせる様に、部屋の中を見渡す。想像していた通り、随分と殺風景な部屋だ。散らかっていないだけまだ幾らかマシだろうが、屋敷暮らしの令嬢からすれば、屋敷が恋しくなる程の内装では無いだろうか。

「お前、自分が家に招いて貰える人間だと本当に思ってたのか」

「いやぁ、ゴリ押しすれば根負けして連れて来てもらえると思ってたんだけど」

「……やっぱり連れてくるべきじゃなかったかもしれない……」

過去に、何度か彼の家に行きたいと強請った事はあった。しかし、その都度何かと理由を付けて拒まれ続けていた。その理由は、単に自身のテリトリーに他者を踏み込ませたくないというものだと読み取っていたが、そう考えると矛

盾が生じる。
幼馴染である私は駄目で、目の前の女性は良かった理由とはなんだろうか。現に、今自身も彼の家に居る時点で矛盾も何も無いのだが、その違いに僅かに疑問を抱く。
しかし、それは嫉妬などの感情では無い。どちらかと言えば、好奇心の方だった。
女性だけでなく、人に関心の無かった彼が初めて見せた行動。それは、彼を家族の様に思っていた自身にとって喜ばしい事でもあった。
いつ死んでもいいと生に無頓着であり、生き続ける事に意味を見出していなかった彼が、初めて自身の意志で行動をしたのだ。仮にそれが、何処かの令嬢を匿う行為だとしても、仮に誘拐だったとしても、彼の変化はただただ嬉しく思った。
「惚れてないなんて言ってるけど、その服を熱心に選んでたのは誰だったかな？」
喜ばしさ故か、揶揄う様にセドリックの腕に抱えられている紙袋を指差す。
「……」
一瞬止まった彼の動きと、僅かに感じた苛立ち。少々、悪戯が過ぎたかもしれない、と思いつつもふふ、と笑うと彼が鬱陶しそうに顔を歪めた。
「――あ、あの、貴方は？」
鈴の転がる様な声が聞こえ、ベッドの方へ視線を向ける。
――しまった。完全に彼女を置き去りにして会話を進めてしまっていた。
今この状況を最も理解できていないのは他でも無い彼女だ。反省しながらも、彼女に優しく微笑みかける。
「あぁ、ごめんね。突然で、びっくりしたよね」
彼女から伝わるのは、疎外感と黒いもやもやした感情。彼女を見ている限り、我儘な令嬢、という訳では無い様だ。寧ろ、何処か謙虚で、何かに怯えている様にも見える。
「私はマーシャ・レイノルズ。貴女の話は……、まぁ、それなりにセディから聞いてる」
セドリックから色々と口止めされている事を思い出し曖昧に述べると、彼女が何かを察したのか、その顔に苦笑いが浮かんだ。それに釣られ、自身も苦笑する。
「貴女が生きていた世界と、私達が生きている世界は違う。と言っても、私達も正しい階級を持ち合わせている訳でも無いんだけど。でも、これから色々苦労する事もあるだろうし、私も貴女の力になれる事はある筈だからさ、気軽に頼ってよ」
「……ありがとう。――レイノルズ、さん」
想像していたよりも、ずっと淑やかで儚げな子だ。そん

な彼女に、マリアの姿が重なる。
マリアも、彼女の様に淑やかな女性だった。いつも何かに怯えている様に生きていて、消えてしまいそうな儚さを孕んだ存在。喉が詰まる様な苦しさを覚え、自身の心を誤魔化す様に「マーシャでいいよ」と軽やかな口調で告げた。
「服、色々とマーシャに用意させた。サイズは……多分大丈夫だと思うんだが」
私と彼女の間に割って入ったセドリックが、服の入った紙袋を彼女の膝の上に乗せた。落とさない様に両手で紙袋を抱えた彼女が、袋の中を覗き込む。
そこで、はたととある事に気付いた。先程、セドリックに言われるがまま服を用意したが、女性にとって最も重要である下着を用意していない。
視界の隅に入った、僅かに引かれた椅子。その上に、美しい装飾が施されたドレスと下着が畳まれて置いてある事に気付いた。ドレスの下に身に着ける、頑丈で硬い下着だという事は手に取らなくても分かる。しかし、とりまず今日一日凌ぐ下着はある様だ。僅かに安堵しながらも、自身が扱う商品の中に女性物の下着はあっただろうか、と記憶を巡らせる。
そんな事を考えている間にセドリックは彼女の傍を離れてしまった様で、少し距離の離れた場所の椅子に腰掛け眉間に皺を寄せていた。私が揶揄った所為か、それとも寝不足か、将又〝トラウマ〟に心を支配されているのか、彼の機嫌はあまり良く無い様だ。今のセドリックに、彼女はあまり関わらない方が良い様に思える。
私はセドリックの心の内が読める為基本機嫌の良し悪しは気にしないが、彼は表情が乏しく常に機嫌が悪そうなオーラを放っている。一般人からすれば、恐怖を感じる様な人間だ。彼女がセドリックを怖がってしまえば、関係が壊れる原因にもなり得る。
彼女がセドリックに何かを言おうと口を開いたが、それを遮る様に彼女より先に言葉を発した。
「このドレスね、全部セディが選んだ物なのよ。確かに用意をしたのはあいつの言う通り私だけど、貴女に似合う服を熱心に選んでた」
かくいう私も、セドリックに聞かれれば間違いなく怒られるであろう言葉を選んでしまった。言葉の選択を誤ったと思いながらも後には引けず、怒られる未来が見えながらも声を潜め会話を続ける。
「貴女、どうやってセディを惚れさせたの？　顔が良いから女は昔から良く寄ってくるんだけど、どうしてか全く興味を示さなくて……」
彼女に投げ掛けた問いは、確かに自身が疑問に思ってい

た事だ。セドリック本人は〝惚れてない〟等と言っているが、彼が彼女を特別視している事は分かり切っている。それが〝恋〟かどうかはまだ本人も分かっていない様だが、恋よりも強い〝執着〟が感じられた。
「何事も適当なセディが此処まで服に拘るなんてね。あんなセディ初めて――……」
それにしても、問いが直球過ぎただろうか。――などと思いながら話していると、意図せず自身の言葉が止まった。自身の言葉を止めさせたのは、間違いなく今背後で鬼の形相をしているであろうセドリックだ。
「……お前、何を余計な事言ってるんだ」
彼の声に滲んだ、明確な怒り。ピリ、と辺りの空気に緊張感が走る。
「えー、だって私もこの子と仲良くなりたい」
目の前の彼女に心配かけまいと軽やかに返すが、少々行き過ぎた発言をしてしまった様だ。
まさかセドリックがこれ程反応するとは思わなかったが、外に出たら説教が待っているに違いない。――いや、説教で済めば良い方だろうか。
「そもそも、長居していいなんて言ったつもりは無い。さっさと帰れ」
「分かった分かった、もう何も言わないから、セディ、離してよ～」
玄関までずるずると私を引き摺るセドリックの姿に、ベッドの上の彼女が困惑しつつも笑みを零した。
それと同時に、再び黒くもやもやとした感情が彼女から溢れ出す。目に見える物では無いが、彼女が放つオーラにも少々変化が生じた気がした。
これは恐らく、嫉妬だ。
だが本人は、嫉妬をしている事に気が付いていない。無自覚に溢れ出してしまったものなのだろう。
セドリックから感じた〝執着〟と同じものを、彼女からも感じる。それはムスクの様に甘ったるく、艶美でも醜悪でもある強い感情。
――二人は、強く想い合っている。
それに気付いた瞬間だった。
しかし二人の想いが通じ合うのに、一体どれだけの時間が掛かるのだろうか。セドリックはトラウマを抱え、況してや女性嫌いだ。女性経験も当然無く、人の心に鈍い。彼女の方はどうか分からないが、彼女は感情がやや欠損している様に見受けられた。それは日常生活に支障をきたす程のものでは無いが、〝愛情〟の事になると途端に疎くなる。人の感情に、鈍い子の様に感じられた。
誰かが道を作ってやらないと、二人は真っ直ぐ歩く事が

出来ない。そんな、印象を抱く。
「――お前、いい加減にしろよ」
セドリックの家を出て、漸く彼がその言葉と共に首根っこから手を離した。
「え？　何が？」
「素っ惚けんな、色々だよ！　余計な事言うなって言っただろうが」
彼の言葉に惚けてみるが、透かさず鋭い言葉が飛んでくる。しかし、もっと激しく厳しい説教が待っていると思っていたが、この程度で済んだ事に思わず拍子抜けしてしまう。
「――あんな少ない口止め料で、良く黙っててもらえると思ったよね」
「だったらその口縫い付けてやろうか」
「冗談だよ」
「冗談って言えば許されると思いやがって」
軽い会話を交わしながら、二人並んで職場を目指す。
もう、家からは十分離れた。此処までくれば、会話があの子に聞こえる心配も無い。もう、〝例の事〟について尋ねても良いだろう。
「――あのさ」
私との口喧嘩よりも体力の温存を取った様で、彼は口を噤んでしまった。そんな彼に、言葉を投げかける。
「――あの子、なんで裸なの」
「――……」
私の問いに、セドリックからもやもやと色々な感情が流れてくる。きっと、今の彼の頭の中には様々な言い訳や私への文句が並んでいるのだろう。
しかし、良い言葉が見つからなかった様だ。彼が「着せる服が無かったんだよ」と一言嘆く様に呟く。
年頃の女に裸で寝させる位ならば、お前が着ていたシャツを脱いで着せれば良かったんでは無いのか、と思わず口に出してしまいそうになるが、今更そんな事を言った所で意味が無い。下着は無いが、衣服は見繕ったのだ。もうあの子が羞恥に耐え裸で眠る事は今後無いだろう。
それよりも、今は彼に言っておかねばならない事があった。セドリックの変化は、確かに喜ばしく思っている。しかし、今彼がやっている事は世間様からすれば誘拐、もしくは拉致と変わらない。手を出したのが街の女であれば何も問題は無かったが、相手は貴族令嬢だ。この世の中で、貴族程的に回してはいけない存在は居ない。
それは彼も理解はしているだろうが、此処は十分に釘を刺しておくべきだ。
「――まぁあんたが安易に女に手を出すとは思えないし、

そういうのに興味ないのは知ってるけどさ」
その場で足を止め、振り返り背後の彼に視線を向けた。
「あの状況、誰が見てもそういう風に見えるし、弁解の余地無いよ」
「――分かってるって」
逃れる様に、彼が私から視線を外す。
「あの子の事、とやかく言うつもりは無いけどさ……。でも、この街の人は皆あんたの事も私の事も知ってるよ。だから何かあれば、猶更目に付く。噂は簡単に広がる。きっと、セディがあの子を匿ってるってのが広まるのは時間の問題だとは思う。だからさ、せめて上手くやんなよ。匿うにしても、変な噂だけは立てられない様に、ね」
いつになく真剣に、冗談を交えず伝えると、彼が意外にも顔に影を落とし口を噤んだ。てっきり、「お前に言われなくても分かってる」位言われるかと思っていたが、彼なりに何か思う事があった様だ。
彼から、あの子を連れ出した後悔は伝わってこない。しかし、今後の事に不安は抱いている様だ。何故あの子を屋敷から連れ出してしまったのか。その答えは、彼の中で未だ出ていない。
彼は理性的でも無ければ、本能的でもない。ただ物欲が無く、無意味に生きている。まるで生きるのが義務だと言わんばかりの顔で、自由でありながら、不自由に。
そんな彼が、意味もなくあの子を連れ出すとは思えない。仮にあの子がセドリックに縋ったとしても、彼があの子に何も感じていなければ彼は女性嫌い故に容赦なく突き放す。
彼から幾度となく伝わる、あの子への〝執着〟。彼は、確かにあの子を欲していた。それは、彼の中に眠るトラウマを上回る程のものだったのだろうか。
今の私に、それを知る術は無い。彼自身がそれに気付かなければ、私はそれを読む事は出来ないのだ。
「まぁあんたも男だし、あんだけ可愛い子と一緒に住んでたらいずれは手を出しちゃうと思うけどね」
いつまでも彼の苦しげな顔を見ていたい訳でも無く、普段通りの私を引き出し、茶化す様にそう告げる。
「……ありえねぇ」
私の言葉にそう呟く様に返した彼の表情は、先程よりも僅かに緩んでいる気がした。
「私が男だったら一晩で手出すね。あんな可愛い子そうそう居ないって」
「知らねぇよ。俺はもう帰るから」
気が付けば、職場のすぐ目の前まで戻って来ていた。
なんと無しに歩いていたが、彼は態々私を職場まで送り

届けてくれたのだと分かり胸にふわふわとした感情が広がるのを感じる。
「――こういう所は、しっかりしてるんだけどな」
背を向けた彼にぽつりと呟いてみるが、彼が振り返る事は無かった。遠ざかっていく背を眺め、顔に張り付けていた笑みを剥がす。
綺麗な道を歩かせる事だけが、その人の為になる訳じゃない。二人の事に、私が口を出すべきでは無い事は分かっている。
しかしそれでも、もう同じ失敗を繰り返したくはなかった。
セドリックは幼馴染であり、大切な家族だ。血は繋がっていなくとも、私にとっては大切な家族だった。そんな彼に、マリアと同じ道を歩ませたくはない。
「――大丈夫。もう間違えない。今度は私が……」
遠くなった背に呟いた言葉は、ふわりと吹いた風に掻き消された。